

児童の「書く力」の向上を目指した ICT 活用による学習成果の共有・交流

福島耕平(北海道教育大学 大学院教育学研究科 准教授)

1. 研究の背景と目的

小学校において、「書くこと」を学習する国語科の授業では、教員は誤字脱字・文の修正・文章の構成等、基礎的な指導から文章全体の構成に至るまでの添削をおこなうが、添削された文章を書き直す活動は、児童にとって学習意欲をかき立てられるものではない。また、本来は「書く・添削・改善」という活動を繰り返すことで、児童の「書く力」は鍛えられるが、実際のところ、1人の担任が30人を超える受けもちの児童全員に対して、日常的に十分な添削指導をする時間的な余裕がないのが現状である。そこで、児童の書いた作文を共有し、書き方や表現方法について交流することで、友だちのよい文章に触れたり、相互にコメントをし合ったりすることを通して、教員の添削指導を伴わなくても、児童の「書く力」を向上させることが可能ではないかと考えた。

本研究では日常的な教科学習において、ICTを活用し、児童が書いた作文を共有し、表現や文構成について交流する活動を展開することで、児童の「書く力」が向上するかを明らかにすることを目的とした。その際、どのような交流の視点を与えると効果的なのか、教員の有効な支援方法についても検討をおこなった。

2. 研究の方法

検証のための実践は、共同研究者の小学校教諭が在籍するM県S市内とT市内の公立小学校2校においておこなった。両校とも単学級、2学年合同の複式学級がある小規模校である。対象は共同研究者が担任しているS市の小学4年生(n=12)、とT市の小学4年生(n=9)、小学6年生(n=8)の児童である。

実践は主に国語科の時間におこなった。学級全員で共有・交流させると少人数とはいえ時間がかかりすぎるため、各学級の実態に応じ、3~4人のグループをつくり、グループ内で共有・交流させることにした。児童の書いた作文を共有・交流するシステムとしては、LMS(Learning Management System)の一つであるMoodle(ムードル)を活用した。具体的には、Moodleのフォーラム機能を使い、児童が作文を直接フォーラムに打ち込み、その後、グループ内でそれぞれの作文に相互にコメントをつけ合う形でおこなった。

作文の共有・交流が「書く力」の向上に効果があったか、児童が最初に書いた作文や相互コメントの内容、改善された作文について、どのような関係がみられるか検証した。また、各実践の後、児童に質問紙調査をおこなった。

3. 実践内容

2021年4~7月にS市の小学4年生において予備実践をおこなった。共有・交流の際に児童にはとくに教示を与えていなかったため、相互コメントが全て感想になっていた。

予備実践において、共有・交流する際、児童に視点を教示する必要があること、伝わる文章を書くことに適した課題を設定することの必要性が改めて明らかになった。そのため、本実践は、「絵をみて自分が危険だと思うことを3つ、絵をみていない人に文でわかりやすく伝える」(T市小学4年生)と「6年間の教科書教材から自分のお勧めの話を要約する」(T市小学6年生)という課題でおこなった。また、コメント交流の際は、児童に読み手に伝わる文になっているかどうかお互いにアドバイスをするという視点を与えた。交流後、アドバイスをもとに最初に書いた文を改善する活動をおこなった。

4. まとめ

実践や質問紙の結果、以下のことが確認された。

- (1) 小学4年生以上では、ICTを活用して作文を共有・交流する活動は可能である。
- (2) 共有・交流をさせるだけでは、相互コメントが内容の感想になりやすく、文章の改善に結びつかない。文章の改善に結びつけるには、作文の課題設定が重要であり、またコメントの際の視点を児童に明確に与える必要がある。
- (3) 小学4年生では、共有・交流をしても、表現の工夫より、誤字脱字の修正のような形式的な部分を意識しがちであるが、小学6年生では「わかりやすい表現になっているかどうか」という視点をもって改善活動をおこなっていた。
- (4) 作文を共有・交流する活動は、小学6年生では、教員の添削指導なしでも、文章の改善につながる。

今回の実践では、作文の共有・交流が文章の改善につながることは確認できたが、児童にどの程度「書く力」がついたかは明らかにできていない。今後の課題としたい。

【共同研究者 勝井まどか(鈴鹿市立合川小学校)・松野秀治(津市立明小学校)・市川理紗子(津市立明小学校)】